

音読を中心とした指導法（実践例）

片野 尚樹

1. 始めに

ご存じのように、一昨年度より始まった中学校の新学習指導要領では、4技能(聞く、読む、話す、書く)の指導・実践を授業内に織り込むことが謳われている。その技能をどのように指導していくか、先生方は各学校で、生徒数、生徒集団のレベル、授業数、副教材の多寡等、様々なファクターに応じて、様々な授業形態で実践されていると思われる。

とはいえ、無数の指導方法の中に確実にあるのが「音読」である。「音読」は、listening, speaking, readingの3技能を持ち合わせる活動で、それが外国語学習に大変効果があることは論を待たない。

が、実際に授業内で実践する上で、その「回数」、「他技能との関連」、「時間」、等、授業内での制限を考えると、これまた無数の方法が考えられる。

我が校でもようやく「音読」中心の授業を展開し始め、その成果に期待をしているところだ。そこで、我が校での実践例を紹介し、新指導要領に困惑されている先生方、学級活動、課外活動などに忙殺されている先生方の参考にしていただければと思う。

2. 授業の流れ

① 音読前の指導

a) 新出単語・熟語の sight translation シート配布
sight translation シートとは、左に英語、右に日本語を示したプリントである。決められた時間内で英→日、日→英の quick response を行う活動で、一人で、又は、pair になって、どこまでできるかを試すものである。pair work の場合は、一方が相手に「英語を発音し」→相手は「日本語を答える」、を繰り返し、でき具合をチェックする。逆に、「日本語訳を言う」→「英語を発音させる」など、バリエーションは様々である。

この活動は、元気な発声を促す意味で必ず生徒を「立たせ」て行い、単語・熟語の定着を図っている。

b) 新出文法事項の確認

教科書の「文法のまとめ」、副教材の該当箇所を熟読させ、プリント教材による簡単なドリルをこなし、そのレッスンで学ぶ新出文法事項を確認させる。口頭、板書などによる文法説明は最小限に抑えることにしている。

このとき注意しているのは、新しい文法項目を教える場合、「英語の語順で理解する」ことである。関係詞や不定詞の形容詞的用法、現在分詞・過去分詞の形容詞的用法等、についてもそのような意識を持たせて指導してきた。例えば、⑤2)でも行うフレーズ読みの際、He is the teacher who teaches us English. の文において「彼は先生です、その人は私たちに英語を教えます。」という順序で理解することを意識させている。

この指導法は後々、「音読活動」に役立つことになるかと確信している。英語の語順、音読、日本語による内容理解の方向を一つにするからである。「音読しながら同時に理解する」ことが、流ちょうな speaking の土台作りにつながる。

予習は「可能な限りしてくる」とを前提としているので、ここまでで、新出単語・熟語、新出文法事項はほぼ定着したと思われる。

② リスニングによる内容理解

c) テキストは見ずに、CDにより、本文を2～3回聴かせ、4～5問の True-False テストを行う。

③ リーディングによる内容理解

d) 70 words 程度の本文を、1分30秒前後で、2回黙読、又は buzz reading をさせ、先の True-False テストの確認、又は修正を行わせる。

中学生が目指すべき速読力は100～120 wpm 程度なので、この程度の負荷は必要である。

④ True-False テストの解答チェック

解答をチェックすることで、テキストの内容を要約させる。

さらに、読み取り Q & A, 英問英答, 英問日答などを行い、内容理解を済ます。

また、音読前にテキストの一文一文に番号をつけ、どこからどこまでの文を読むのかも明確にしておく。押さえておくべき文法事項がある場合は、各文につけた番号をもとにして簡潔に板書・説明し、ノートに書き取らせる。説明の時間を極力少なくすることを心がけている。

この後に、将来目指すべき 150～180wpm の速読力、リスニング力養成のために「高速読み」を行うこともある。pair になり、2分程度でテキストを3回 buzz reading させる競争である。「読み終わったら、相手の生徒の教科書を取り上げてしまいなさい。」と指示すると、生徒は嬉々として取り組む。「滑らかに英語を話している」という実感を持たせるのである。

⑤ 音読

さて、いよいよ音読である。音読の方法は様々であるが、基本的に以下の4つが大きな幹となるであろう。

- 1) listen & repeat(テキストを見ながら)
- 2) reading(テキストを見ながら)
- 3) retention(テキストを見ずに listen & repeat)
- 4) shadowing

1) listen & repeat を2～3回行う。

2) reading の1回目に、フレーズ毎に slash, 文の最後には double slash を記入させる。CD に合わせて2～3回 overlapping させる。

次に、内容理解の補足・確認活動で、フレーズ読みを実行する。

<T: 日本語 → Ss: 英語 → T: 英語 → Ss: 英語>

T: 彼は先生です

Ss: He is the teacher

T: He is the teacher

Ss: 繰り返す。

T: その人は私たちに英語を教えます。

Ss: who teaches us English.

T: who teaches us English.

Ss: 繰り返す。

この活動は、フレーズ、又は文によるテキストそのものの sight translation とも言え、① a) の応用の活動で、日本語の意味とその英文を確実に結びつけ、内容理解を完成させる。

2 回目は一文ずつ行う。負荷を多くし、4) の shadowing につなげる狙いがある。

3) retention を1～2回行う。

これができるようになれば、本文の内容、単語・熟語・文法の理解はほぼ定着したと考える基準としている。

4) shadowing を1～2回行う。

この時の shadowing は、トップダウンシャドローイング(十分理解している英文を素材とする)であり、大半の生徒は難なくできるようになっている。ボトムアップシャドローイング(初めて接する英文を素材とする)は中学生には難易度が高いので実行していない。

「音読」させるときの問題は、何回、どの程度の時間をかけて行うかという点である。chorus reading だけでは、どうしても集団の発声に紛れて、発話していない生徒がでてくるし、また、全体が飽きてくるという問題もある。そこで、4人で構成するグループを10組程度作り、色々な組み合わせで、「立たせて」音読させることを心がけている。

その他、リレー読み、四方読み、突っ込み読み、等を適宜実行し、英語は「実技」であることを体感させている。

⑥ ディクテーション

一部を空所にしたテキストを与え、ディクテーションをさせる。時間がある場合は、別の部分を空所にしたものを行うが、家庭学習に委ねることが多い。

これにより、スペリングの曖昧さを取り除き、音声と綴りを一致させる。教科書と照らし合わせ、正解は一つ一つに○をつけさせ、達成感を味わわせる。

⑦ テキストの部分 sight translation

最後の仕上げに、テキストの一部を何か所か日本語にしてある英文を音読させる。日本語を即座に英語に直す訓練で、この段階では、生徒はテキストをほとんど暗記しているので、苦にならない生徒も多い。

⑧ テキストの全文 sight translation

本文の日本語を見ながら、即座に英語にしていくトレーニングを行う。暗記していれば、勝手に口から英文が発せられる。

⑨ 英作文、暗写

復習は workbook などで行い、2回目以降のディクテーション、本文サイトラは宿題とする。⑧が終了した次の授業で、英作文試験や暗写を行う。頭の中の英語を手で output する活動である。

以上で一連の授業の流れは終了となる。1レッスンには2～3のパートと250 words 程度の reading 用テキストがあるが、それぞれのテキストでこの流れを繰り返し、レッスン全体の理解、暗唱を完成させていく。1レッスンが終了するまでに50回以上の音読をする計算である。

ここまでの活動を、技能別に表1にまとめた。

表1

活動	listening	reading	speaking	writing
②	2			
③	1	2～5		
⑤	8～12	8～12	8～12	
⑥	1～2			1～2
⑦		1～2	1～2	
⑧		1～2	1～2	
⑨				1
合計	12～17	12～21	10～16	2～3

改めてこれを見ると、一般的な指導手順であるPCPP(Presentation-Comprehension-Practice-Production)の流れには沿ってはいるのだが、Production(writing)が足りないと思われる。

とはいえ、picture cardの言語化、小テスト等を考慮にいれれば、生徒たちは、input—intake—outputという一連の言語活動を十分行っていると思われる。この部分は今後の検討課題である。

3. 理想的モデルとの比較

音読を中心とした授業モデルは以下のように進めるのが理想的とされている。

- ① リスニングによる内容理解
- ② リスニングしながら黙読による内容理解

③ 音読練習

④ まとめT or F Quiz(Reading and Correction)

⑤ 復習(英問英答)

⑥ Activity プラス・ワン・ダイアローグ

⑥は学習した英文に一文加えて、より自然な発話にする活動である。

我々の順序にすると、①→②→④→③になり、⑤は英作文で代行し、⑥は行っていない。しかし、②、③においては相当量の活動を取り入れており、1～1.5コマの授業で行うには十分な量だと思われる。

4. 最後に

以上のような授業形態によって、その成果が現れるにはまだまだ時間がかかると思われる。最低でも半年、1年といったまとまった時間経過を踏まえて、その効果、成果を検証する必要があるだろう。

とはいえ、生徒たちは、これまでの文法・訳読中心の授業とは比較にならないほど、input—intake—output活動をこなしており、英語力向上が、生徒自身にも、教える側にも目に見える形で現れるものと期待しているところである。

新指導要領の導入をきっかけとして、よりユニカティブな指導法、英語による授業などが強く推奨され、「音読」は避けて通れない活動である。

とすれば、英語に限らず、外国語教育のコアな部分の指導法として、「音読」が据えられていくのは間違いのない。先生方のアイデア、個性的な授業方法などは、その後に続くものになっていくのではないだろうか。

「音読」が、全国の外国語(英語科)教育の指導者に広く認知され、文法・訳読中心の授業形態が大きく変わっていくことは、外国語(英語科)教育の大きな進歩と言えるだろう。

参考文献

- 安木真一 『英語力がぐんぐん身につく！驚異の音読指導法』(2010)、明治図書
 鈴木寿一、門田修平 『英語音読指導ハンドブック』(2012)、大修館
 門田修平 『シャドーイング・音読と英語習得の科学』(2012)、コスモピア